

ジャック・ロンドンに対する薩摩武人の影響

——黒木為楨^{ためもと}の場合——

森 孝 晴

ジャック・ロンドンと日本、そして鹿児島

ジャック・ロンドン（1876-1916）は、2度にわたって来日している。一度目は1893年のことで、無名の17歳の青年ロンドンがアザラシ漁船に乗り組み、日本近海まで来て小笠原諸島や横浜に上陸している。二度目の来日は1904年で、人気作家ロンドンがハースト系新聞の特派員として日露戦争の取材を目的として日本を再訪している。このときは横浜に上陸し、神戸、長崎を経て門司に至り、逮捕されて一時小倉の刑務所で足止めを食った後、中韓国境近くの最前線まで出かけて取材を敢行した。

この二度目の来日がロンドンに与えた影響は大きかった。彼はこの四カ月余りの滞在で日本や日本人に対する関心を飛躍的に高め、一方で偏見も手伝って日本や日本人を脅威とする考えを強め、また一方で、日本人とその生き方に強く惹かれていったのである。このことは、従来ロンドンの人生観や価値観の成立過程を見る時にあまり重視されてきたとは言えないだろうが、文学的な影響とも関わってもっと焦点を当ててもいいことのように思われる。

ロndonは日本の各地を通過しており、特に門司で逮捕された時や韓国で足止めを食らった時に日本の軍人からかなり悪い印象を受け取っているが、一方で不思議なことに、足を踏み入れてもない鹿児島の人物に強い影響を受けているのである。最近の筆者の研究でこの影響が思った以上に大きく、深いものであることがわかってきた。さらに、ロンドンが日本を代表する動物文学者にして著名な児童文学作家でもある椋鳩十に大きな影響を与えているのだが、椋は鹿児島を本拠とする作家なのである。¹⁾

こうした鹿児島とロンドンの縁は単なる偶然なのだろうか？ そうとばかりは言えない側面もあるのではないか。ともあれ、ロンドンに大きな影響を与えた鹿児島人とはだれかと言えば、それはまず、二人の薩摩武人である。一人は幕末の薩摩藩英国留学生である長沢鼎だ。そしてもう一人は、日露戦争の英雄のひとりである黒木為楨陸軍大将である。この二人の共通点はどちらも鹿児島市内の下級武士の子であり、ほぼ同じ地区に住んでいたことである。また二人に共通する精神は、武士道と薩摩の自顕流だと思われる。ロンドンは少なくとも二人の薩摩武人に直接会っているわけで、この二人からの影響を見ていくことは、案外ロンドンの本質を見るための一つの大きなヒントになるかもしれないのだ。

本稿では、このうちの黒木大将、つまりゼネラル・クロキに絞って見ていくことにしたい。

ロンドンの日露戦争従軍の経過

ロンドンには実に125ページにも及ぶ日露戦争従軍記を残している。

1904年（明治37年）1月22日にサイベリア号で横浜に到着したロンドンはすぐに東京に達し、28日には神戸に向かっている。30日には長崎にいたが、翌31日には門司に向かい、2月1日に町の写真を取っていて逮捕される。2日には小倉にあって、3日にカメラを取り返すと下関に向かった。6日に釜山（プサン）に向けて出港したロンドンは、9日にはさらに仁川（インチョン）に向かい、木浦（モクポ）を経て10日に群山（クンサン）に着き、15日には仁川に到達した。一方、黒木大将率いる第一軍はすでに2月12日に仁川に上陸を開始していた。ロンドンは、日本軍当局からこの黒木軍に同行するよう割り当てられ、このあとは鴨緑江戦の現場まで行動を共にすることになる。

2月26日には平壤（ピョンヤン）に向けて立つ準備が完了し、3月4日には京城（ソウル）、5日までには平壤に達していた。ロンドンはさらに北上し、8日にポヴァル・コリ、10日には順安（スナン）に達した。しかし、ここで彼は、軍の命によりしばらく足止めを食うことになる。軍は記者の安全のためなどと言っていたようだが、むしろ軍事上の秘密が漏れることを懸念していたようである。

ロンドンは3月13日になってもまだ順安にいたが、16日にソウルへの退去命令が出て、18日にはソウルに戻りまた足止めを食らった。彼はむかついた状態で過ごし、28日になってもそして4月に入ってもソウルにいた。4月中旬に至ってついにロンドンは北への移動を強行し、17日には安州（アンジュ）に、21日には最前線に近い町である義州（イジュ）に達していた。一方、この日、第一軍主力（近衛、第二、第十二の三個師団）は鎮南浦に上陸していた。ロンドンは30日になっても義州にいて戦況を確かめていたが、5月1日には、ここからほど近い満州側の安東から報告を書いている。

黒木第一軍は、4月21日までに全部隊が鴨緑江（ヤル川）右岸（韓国側）の義州一帯に展開を終了していた。ロンドンは安東にあって、（軍事当局や検閲取締官によって最前線に出て取材することを制限されたので）やや遠目にはあるが、日露戦争で初の大きな陸上戦であった鴨緑江決戦とその中の黒木軍の戦いぶりを目撃することになったのである。第一軍の任務は、川を渡って対岸の九連城に布陣するロシア軍主力を撃破しその先に控える鳳凰城を目指して進軍することであった。第一軍の作戦行動は4月25日に開始され、29日には架橋作業に入り30日に渡河を始めた。31日から5月1日にかけて激しい戦闘が繰り広げられたが、1日の戦闘でロシア軍は敗走し鳳凰城に逃げ込み、九連城を占領した第一軍は5月6日に、ロシア軍がさらに総退却した鳳凰城にほぼ無抵抗のまま入城した。これにて第一軍の緒戦は大勝利に終わったのである。

ロンドンは5月2日、5日、10日とこの戦闘の様相を報告したが、この戦いの印象は特別に鮮烈だったようである。17日の段階で鳳凰城の第一軍本部にまで達したものの、彼は、これほどまでに規制が強いとまともな取材にはならないと失望して踏ん切りをつけ、6月30日に帰国した。しかし執念で最前線近くまで行きついてその目で日本軍の戦い方や戦争の実態を見たロンドンには、

自分の人生観に大きな影響を受けないではいられなかっただろう。²⁾

ゼネラル・クロキとは？

ジャック・ロンドンが最前線まで同行し、その戦いぶりをつぶさに見てきた第一軍の司令官は、ゼネラル・クロキこと黒木^{ためもと}為禎陸軍大将である。黒木は、鹿児島市加治屋町生まれの下級武士の出身で、1844年（弘化元年）に生まれ、1923年（大正12年）に79歳で亡くなっている。同じ下級武士出身の西郷隆盛の訓育を受けて戊辰の役（1868年、明治元年）には城下四番隊長として転戦した。西南の役（1877年、明治10年）では政府軍の別動第1旅団の先ぼうとして活躍、明治26年には中将（第6師団長）となった。

軍人として大きく飛躍するのは日清戦争（1894年、明治27年）からである。この戦争で第6師団長として武功を立てた黒木は、栄えある近衛師団長に抜擢され（1896年、明治29年）、1903年（明治36年）11月にはついに陸軍大将となった。この後も彼は1904年（明治37年）1月に軍事参事官になって司令官の地位が約束され、日露戦争が1904年（明治37年）に始まると、2月に、先ぼうである第一軍の司令官となったのである。

日露戦争における第一軍の鳳凰城までの進軍についてはすでに述べたが、このあと黒木軍は遼陽目指して西北進し、6月から8月にかけて各地を攻略した末に8月下旬に遼陽をめぐす総攻撃を開始した。この戦いは鴨緑江と同様に激戦であったが、9月4日ついに第一、二、四連合軍が遼陽を占領した。第一軍のこれらの戦果は、韓国防衛の任務を果たしただけでなく、ロシア兵の旅順集結とその南下をけん制する重要な意味を持っていたのだ。

ところで、黒木はなぜ「ゼネラル・クロキ」とも呼ばれるのか。もちろんこれは「黒木大将」の英語訳で、外国特派員の間ではどの将軍も「ゼネラル」をつけて呼ばれていたわけだ。しかし黒木の場合はほかの日本人将軍とは違う意味でこの名で知られていたようだ。『三代軍人列伝薩摩の武人たち』にはこう記されている。

日露戦争の名将といえ、わが国では「海の東郷、陸の乃木」というのが普通である。しかし、どうも海外では、「海の東郷」は同じだが、「陸は黒木」だったのではないかと推測される。鴨緑江の初戦を皮切りに、遼陽会戦、奉天会戦に勇名を揚げた黒木の名は、海外でもよく知られているようだ。³⁾

さらに同書のこの後の記述によれば、当時海外では、英語で「ゼネラル・クロキ」として通っていたようで、ロシアでは「黒木はロシアの血を引いているから強いのだ、という珍説が飛び出した⁴⁾」そうだ。また、メキシコやカナダでも銀山や鉄道の駅に「クロキ」の名をつけたということだ。つまり、もしかすると黒木は日本でよりも海外の方が有名であったかもしれないのだ。

では黒木はどういう人物として伝えられてきているだろうか。上掲書には、

黒木はもっとも武人らしい武人で、戦闘ともなればつねに陣頭に立って指揮したから、将

兵の信頼は絶大なものがあった。

——（中略）——

大正十二年二月四日死去。ゼネラル・クロキ死亡の報に、ニューヨーク・タイムズは長文の社説をかかげ「つねに細心の注意をもって部下の軍隊を操縦し、敵陣薄きを発見するや正面攻撃をなすにちゅうちょしなかった」と、武人黒木のおもかげを評した。⁵⁾

とあり、海外でも「武人」の代表として知られていたようだ。また、*The Standard* の従軍記者 William Maxwell は、鴨緑江戦の後で捕虜たちと同席した黒木の様子について“a strong, clear-cut face — European rather than Oriental”⁶⁾の持ち主で、リラックスして座りいつも煙草をくわえている口元は“the firm-set lips”⁷⁾だったと回想している。つまりこれはいかにも武士然とした姿である。

司馬遼太郎は、著書『坂の上の雲』において黒木にずいぶん言及している。司馬は薩摩武士黒木の人格と信念についてこう述べている。

…日本側の黒木は、クロバトキンの半分ほどの軍事的知識もなく、その十分の一ほどの西欧的教養もない。その面では単に一個の薩摩武士であった。

が、数万の軍隊を統べるだけの人格と、戦いに対する不退転の信念をもっている点では、クロバトキン⁸⁾ははるかにおよばなかった。

また、そのロシア軍の極東軍総司令官であったクロバトキンから見た黒木の印象について、司馬は、

クロバトキンは、あとで知った。かれは自軍に対して、激怒した。

「クロキは手ごわい」

とかねてかれは言い、黒木軍に対しては過大なほどの大軍を対峙させてあったのである。…黒木はその敵の目をぬすみ、夜陰こっそりと大軍を陣地からぬけださせて…黒木軍は敵城の外濠をわたったといっている。⁹⁾

と、紹介している。黒木が一筋縄ではいかない男であったことがよくわかる。

黒木の戦い方がまた驚くようなものであり、それは黒木そのものの性格や武士道が感じられるものである。たとえば、司馬は、クロバトキンが報告書に書いた言葉として「その攻撃は、狂暴¹⁰⁾を極めた」という表現を紹介しているし、次のようにその戦い方について説明している。

黒木軍が…信じられぬほどの勇猛さであった。

あとは…仙台師団が師団ぐるみの夜襲を敢行して、…敵陣地をことごとくうばってしまったことは、世界史の奇蹟とされた。…

それにしても黒木軍全般の比類を絶した強さは、どのように理由づければいいのか…¹¹⁾

東部戦線の黒木軍がやった巧妙さは、敵の第二戦防御陣地にせまりつつ、じつはその意図

はまったく方角ちがいの太子河を渡河しようとするところにあった。

——（中略）——

…ドイツ参謀本部から派遣されてきているホフマンという若い将校…よりぬきの秀才であった。かれはのちにこの黒木がやった壮大な戦術について終生語り、語るだけではなくそれについての著書まで書いた。¹²⁾

また、ロンドンとともに黒木軍に従軍した *The Times* の特派員 David Fraser は、1904年5月3日付の「黒木軍の進軍 (General Kuroki's Advance)」と題した安東からの報告記事の中で、

In morale the Japanese soldiers are equal, possibly superior, to European troops. Their tactics are superior to those of the Russians. They outwitted their enemy, who did not contemplate any serious defence. The loss of the guns was due to the slaughter of the horses and to the quick movements of the Japanese and the utter disregard of life which they displayed.¹³⁾

と述べている。日本軍、すなわちこの場合黒木軍の戦い方は速くて誠に激しく、巧みで、士気も高い、ということがわかる。¹⁴⁾

日本人への反感と実感としての脅威

ロンドンが生きた時代は世紀転換期であったが、この時代はまた、アメリカにおいて白人以外の人種への偏見が強まった時代でもあったのである。このことについて巽孝之はこう説明している。

十九世紀から二十世紀への橋渡しがなされるアメリカの世紀転換期は、日清戦争（一八九四—一九〇五年）・日露戦争（一九〇四—一九〇五年）の影響により、典型的なアジア系差別すなわち「^{イエロー・ペリル}黄禍」（yellow peril）が叫ばれた時代である。もともと南北戦争後には、一八六八年以降、中国人労働者を太平洋鉄道建設のため積極的に採用するバーリントン条約が適用されながらも、とうとう彼らには合衆国市民権が与えられることがないという事情があった。…やがて在米中国人の数が増大するのに加え一八七〇年代には経済不況が起り、白人たちはこれら新参者が自分たちの飯の食い上げに追い込んでいるという被害妄想を強めるに至ったのだ。とりわけ世紀末には中国人恐怖が強まり、…折も折、ロシアのほうも一八九五年、日清戦争で勝利をおさめた日本に対し、ドイツやフランスとともに三国干渉のかたちで圧力をかけ、そこにいわゆる^{イエロー・ペリル}黄禍論¹⁵⁾が決定的に浸透する素地が生まれる。

また、歴史家のエリック・フォーナーは『アメリカ 自由の物語』の中で、この時代について、

世紀転換期には、「人種」という言葉——人種対立、人種感情、人種問題——はアメリカの公的言説の中で中心的位置を占めていた。それぞれの「人種」の先天的能力なるものがよく引き合いに出されて、様々な労働者集団の生活水準から、様々な民族のアメリカ民主主義に参加できる能力の有無にいたる、あらゆることが説明された。……移民排斥論者たちは、人種や民族が競い合い、それぞれが世界的な階層秩序の中である位置を占めるという昔のヴィジョンを復活させた。移民流入によって、国内的にも世界的にも覇権を握るのにもっとも適しているアングロ・サクソン系を「劣等な」人種が数の上で上回ることが可能となるため、アメリカ社会の性質が弱体化すると主張された。

——（中略）——

再建の理想からの後退はアングロ・サクソン主義の復活を供った。アングロ・サクソン主義は人種の排除の新しいレトリックを用いて、愛国心と外国人嫌いとの国民の民族文化的定義と結びつけた。黒人や他の「劣った」グループを野蛮人や犯罪人同然に描いた侮辱的な図像が大衆雑誌に掲載され、新しい政治的・経済的不平等を正当化し、「定着させた」¹⁶⁾。

と、解説している。このようなムードの時代の中ではロンドンも例外ではいられなかったのは不思議ではない。

このような時代のムードも手伝って、前述したように日本軍にたびたび足止めを食らったり、彼らが命を軽々しく扱う様を見たりしたことで日本人に悪い印象を持ったロンドンは、帰国後すぐに“The Yellow Peril”という長文の論文を書いて激しく日本を攻撃した。しかし、その内容は個別の事象や個人に対する批判ではなく、日本（人）が支配力をもち戦闘的な人種になることを恐れ、日本が世界征服に乗り出すようなことになれば大変であることを警告し、日本の脅威を伝えようとしている。この5年後にもロンドンは“If Japan Wakens China”という短い論文を書いて、日本が中国と組むことの脅威を訴えているが、帰国直後の激しさは消え、むしろ、日本人や中国人は質素で勤勉であると評価し、だからこそ彼らが競争相手になれば白人たちの夢とアジアの夢がぶつかって、経済的な衝突から軍事的衝突にまで発展するかもしれないと、まさに予言的なことを言っている。

もちろんロンドンには日露戦争への従軍中に、日本人への偏見と思われるようなことや日本人への警戒心や不満を何度も書き記している。‘Japs’という言葉も何度も繰り返されるし、Yellow Perilという言葉も何度か出てくる。“If Japan Wakens China”でのちに展開される警告も“In the past I have preached the Economic Yellow Peril; henceforth I shall preach the Militant Yellow Peril”¹⁷⁾ (24) という文ですでに書かれている。また、鴨緑江での黒木軍の激しい正面攻撃を目の当たりにした時には、“But the Japanese are Asiatics, and the Asiatic does not value life as we do. … All these factors tends to justify the Japanese in accepting the slaughter of a needless frontal attack” (105-6) と言って非難している。

特にこの決戦では、日本側が戦いの情報を知らせない上に配信も許さず、最前線にも行かせなかったため、ロンドンの我慢も限界に達し、

The Japanese resembles a precocious child who talks philosophy one moment, and the

next moment is making mud pies. One moment he is acting with the wisdom of the West and the next moment with the childishness of the East. (124)

と、揶揄したり、

The Japanese does not in the least understand the correspondent or the mental processes of a correspondent, which are a white man's mental processes. The Japanese is of a military race. …

The Japanese cannot understand straight talk, white man's talk. (125)

と、突き放すような言い方をしたりしている。

こうして見てみると、ロンドンの日本人への偏見はこの従軍でかなり強化されたように見える。確かに、*Jack London American Rebel*の中で Philip S. Foner は、人種的に身びいきすることを非難されたロンドンが“I am first of all a white man and only then a Socialist”¹⁸⁾と言って開き直った話を紹介しているし、ロンドンと親交のあった Oliver Madox Hueffer も“Jack London was, above all things, a worshiper of the Anglo-Saxon”¹⁹⁾と断定している。Jonah Raskin が“his deep-seated racism”²⁰⁾と呼ぶロンドンの人種主義は否定しようもないが、ロンドンは果たしてただ日本人を嫌っていただけなのだろうか。

日本的な生き方と黒木^{ためもと}為楨

① 武士道と黒木

武士道とはなんだろう。黒木の戦い方のどこに武士道があり、ロンドンははたして彼のそういう部分に惹かれていたのだろうか？

1899年（明治32年）に出版された新渡戸稲造の『武士道、日本の魂』によれば、武士道は「壮大な倫理体系」²¹⁾でその掟の中で最も厳格なのは〈義〉である。義と並んで重要な基本原理は〈勇〉で、これは義を決断する力のことだ。そして、「義は、もうひとつの勇という徳行と並ぶ、²²⁾武道の双生児である」、すなわち、「勇は義の相手にて裁断の事也。道理に任せて決定して猶予せざる心をいふ也。死すべき場にて死し、討つべき場にて討つこと也」²³⁾ということになる。「やる時はやる、そして迷わない」というところだろうか。

勇（気）とは落ち着きのこと、心の平静さであり余裕である。〈仁〉とは愛・寛容・他者への同情・憐憫の情のこと、「武士の情け」すなわち「武士のやさしさ」に内在している。したがって「それはサムライの慈悲が盲目的衝動ではなく、正義に対する適切な配慮を認めているということの意味している。またその慈悲は、単にある心の状態の姿というのではなくて、生かしたり殺したりする力を背後に持っていることを意味する」²⁴⁾ということになり、「窮鳥懐に入る時は、²⁵⁾獵師もこれを撃たず」ということわざに通じるものだ。

〈名譽〉は武士にとって最高の善であり、「忍耐」と関係がある。そこから「取るに足らない侮

辱に腹をたてることは、すぐれた人物にはふさわしくないが、だが大義のための義憤は正当な怒りである」という考え方に到達する。〈忠義〉とは「主君に対する臣従の礼と忠誠の義務」²⁶⁾のことで、武士道では「個人よりも国がまず存在する……そのために個人は国のため、あるいはその合法的権威のために生き、または死なねばならない」²⁷⁾と考える。したがって、「生命はここに主君に仕える手段とさえ考えられ、その至高の姿は名誉あるべきものとされたのである」²⁸⁾ということになり、それは時に生命軽視とも見られたのであろう。

新渡戸は言う。

サムライにとっては感情を顔にあらわすことは男らしくないと考えられた。

立派な人物を評するとき、「喜怒を色に現わさず」ということばがよく用いられた。²⁹⁾

“寡黙”は「長い年月にわたる克己の訓練」の現われだからだ。また、外国人が武士道を語るときよく象徴とされる「切腹」についても、彼は「名誉を何よりも重んずる考え方は、多くの人びとにとってみずからの生命を捨てる十分な理由となった」³⁰⁾とし、切腹は「純化された自己破壊」³¹⁾で、「きわめて冷静な感情と落ち着いた態度がなければ、誰も切腹など行いうるはずはなかった」³²⁾と説明している。

では、女性は武士道の蚊帳の外にいたのだろうか。新渡戸はこれを否定し、

武士道は本来、男性のために作られた教えである。したがって武士道が女性について重んじた徳目も女性的なものからかけ離れていたのはむしろ当然であった。

武士道は、同じく「自己自身を女性の有する弱さから解き放ち、もっとも強く、かつ勇敢である男性にもけっして負けない英雄的な武勇を示した」女性を讃えた。³³⁾

と述べて、女性もその例外ではないことを示している。また、人間ではないが、「サクラ」も、

サクラの花の美しさには気品があること、そしてまた、優雅であることが、他のどの花よりも「私たち日本人」の美的感覚に訴えるのである。

私たちはヨーロッパ人とバラの花を愛でる心情をわかち合うことはできない。バラには桜花のもつ純真さが欠けている。³⁴⁾

という特徴を持ち、武士道を愛する日本人の精神に通じているのだ。

新渡戸はこうまとめる。

サムライは民族全体の「美しき理想」となった。「花は桜木、人は武士」と歌われた俗謡は津々浦々に行き渡った。

…いかなる人間の活動も、いかなる思考の方法も、武士道からの刺激を受けずにはいられなかった。

日本の知性と道徳は、直接的にも、間接的にも武士道の所産であった。

さまざまな局面で武士道は、…日本人全体に対する道徳の基準を供給した。

武士道は当初、「エリート」の栄光として登場した。だがやがて国民全体の憧れとなり、その精神となった。³⁵⁾

ロンドンもまた、こうした「宗教の列に加えられるべき資格を有する道徳体系」³⁶⁾に「憧れた」一人ではなかったか。

上述したようにロンドンは、日露戦争に従軍することで日本人への偏見を強め、日本人に対して怒りを感じたのであるが、従軍記をよく調べてみると、日本人や日本軍について冷静に分析し、高く評価していると思われる部分も少なくないのである。たとえばロンドンは、日本兵について、

I think as to the quietness, strictness and orderliness of Japanese soldiers it is very hard to find any equals in the world. … I have never seen even a single Jap soldier who got drunk or acting violently, yet its infantry is perfectness itself, … Japanese is the race who can produce real fighting men, and its infantry is simply superb. (13)

と、まるで讃辞のようなことを言っているし、ソウルからの報告の中でも“*I doubt if there be more peaceable, orderly soldiers in the world than the Japanese… but the Japanese are not boisterous. They are very serious.*” (41) と述べて日本兵をまじめだとほめているほか、進軍する日本兵の不屈の歩き方にも感心し (81)、平壤からの報告では“*The Japanese soldiery and equipment seem to command universal admiration.*” (47) とまで評している。

ロンドンのこの時の日本人論の結論は“*The Japanese are a race of warriors*” (42) であり、“*The Japanese are surely a military race.*” (53) であろう。彼は日本人を「武人の人種」「軍人の人種」と呼んだのであり、これは警告であるとともに、隠しきれない讃辞でもあったのはいか。つまりロンドンは、日本人に警戒感を抱くとともに、一方では日本的なものに引きつけられ、日本人の生きざまに憧れるような気分を抑えきれなかったのではないか。

②示現流と自顕流、そして黒木

ロンドンには黒木の所作や戦い方に武士道を見ていたと思われるが、黒木の武士道は薩摩の武士道である。薩摩の武士道はおそらく日本でも最も厳しい武士道の一つだと思われ、黒木は下級武士の家に生れ、西郷などの教育を受けて成長したいわば本物の武士である。薩摩の武士道を十分に身につけて数々の戦争を戦ったわけで、その戦法や戦略にも武士道の影響が多々あったことは想像に難くない。

では、薩摩の武士道にはどんな特徴があるのだろうか。薩摩隼人という言葉があることからわかるように、薩摩ではことさら男らしさが強調され、勇猛果敢で頑固なことが評価される傾向がある。薩摩では早くも16世紀末から郷中教育^{こじゅう}というもので子供たちに武士道が伝えられてきた。各郷ごとに青少年の自治組織があり、年長者が年少者を教えるというのが基本で、徳育と体育が行われた。特に「体育では、剣術をはじめとする武芸全般の鍛錬、相撲や山坂達者と呼ばれる長距離走破を³⁷⁾実践して、質実剛健の気風を養った」³⁷⁾ そうである。薩摩の武士道の気風は

「尚武³⁸⁾の精神」すなわち「武事や軍事を重んずる精神」で、その戦法は、

…「徹頭徹尾攻勢を取り」「先ず敵の主隊を遮二無二直突して之を粉碎し、全軍を撃滅する」「兵勢は多きを尚^とばずして精練を要し、戦役は久しきを欲せずして一挙に勝敗を決し、戦術は猶予疑念を忌みて果敢勇往を尚ぶ」「島津氏の軍を起すや、必ず名分あり……不俱戴天の仇敵といえど、降を乞う者あれば之を免し、或は敵将の遺骸を送致し、或は敵の戦死者を供養³⁹⁾せり」

などというものである。まさに黒木の戦い方を彷彿とさせないだろうか。こうした考えが「果敢勇武・剛毅不屈の精神⁴⁰⁾」や「絶対に後戻りしない勇猛果敢な生き方⁴¹⁾」につながり、「薩摩独自の郷中教育」として見事に結実し、家庭教育でも、「負けるな」「嘘をつくな」「弱い者いじめするな」を強調するに至ったのである⁴²⁾。

しかし薩摩の武士道の基本的な特徴は、薩摩の剣法の中心にあり秘剣として天下に恐れられた薩摩独自の示現流（自顕流）の精神にあるのではないかと思われる。郷中教育の中で行われた剣術の鍛錬とは、その多くが示現流（自顕流）だったが、実は、「じげん流」には二派があり、主に下級武士が学んでいたのは「薬丸自顕流（野太刀自顕流）」の方だったようである。

示現流は、1587年（天正15年）に藩主島津義久に随行して上京した東郷重位が、天真正自顕流の奥儀を授かって帰り、タイ捨流を加えて創始した剣法であり、東郷が藩の剣術指南となって以降、藩校で教えられるご流儀となり、もっぱら上級藩士の教育に寄与してきた。一方、薬丸自顕流は、薬丸兼武が、薬丸家に伝わる「野太刀流（野太刀の技）」の独自の技を研きつつ示現流をも包み込んで、野太刀自顕流（薬丸自顕流）として完成し、創始したものである。薬丸自顕流が藩のご流儀として認められたのは幕末近くになってからとも言われるが、それまでに下級武士である郷士の間には普及していたようだ。つまり示現流は主として上級武士たちの間にきわめて厳格に伝えられ、薬丸自顕流は下級武士たちに伝えられたのである。自顕流は明治の時代を迎えても「学舎」によって伝えられ、現在まで受け継がれている⁴³⁾。

薬丸自顕流の門弟は幕末の時期には166人を数えていたそうで、その中には西郷軍を支えた大山綱良、西郷従道^{つぐみち}、“人斬り”半次郎として知られた桐野利秋、日本海海戦勝利で知られる日露戦争時の連合艦隊司令長官東郷平八郎などのほか、日露戦争時の将軍が何人も含まれている。黒木の名は筆者の見限りの自顕流資料には見当たらないが、たとえ門弟ではないとしても、黒木が下級武士として幼いころから郷中教育の中で自顕流を学んだ可能性はきわめて高い⁴⁴⁾。

自顕流の身上は何といっても「速さ」と「強さ」であろう。言い換えれば「神速」と「剛剣」である。そのため全国の武士に恐れられたようだが、新撰組の隊長近藤勇は隊士に向かい「薩摩の初太刀は外せ」と指示したそうである。それほど抜きが速く、打ちかたが激しいのである。「一打必倒」「一刃必殺」を掲げて速さと地力を養うため、藩士は「猿叫^{えんきょう}」を挙げながらひたすら抜きや続け打ちを続け、剣体一致を目ざす。そこには、抜けば必ず「一气」にかかって敵を圧倒する厳しさがある⁴⁵⁾。

さて、薩摩の武士道の根幹をなしている可能性が高い自顕流の考え方とはどのようなものだろう。それは、両派に共通する「意地」というもので、次の四つが知られている。

1. 刀は抜くべからざるもの
2. 一の太刀を疑わず、二の太刀は負け
3. 刀は敵を破るものにして、自己の防具に^{あら}非ず
4. 人に隠れて稽古に励むこと

1は、「刀はいざという時以外はみだりに抜くものではない」という戒めだ。武士道の真髓であろう。2は、薩摩独自の考えで、「一刀必殺」「地獄の底まで叩き斬れ」という気概と激しさを示している。3は、薩摩の剣は身を守ることを前提としていないということで、強い覚悟を持ち余計なことは考えるなということだろうが、見ようによっては恐ろしい考え方である。4は、「一人稽古をするようになれば本物ではない」ということだ⁴⁶⁾そうである。

2に関連して、自顕流について語る次のような説明文もある。

よく肉を切らせて骨を切るということばが言われるが、自顕流には、その考えはない。我が身の打撃を少くして、敵を倒すと考えるのは、そこにまだ何程かの未練がある。一挙に死を極めるのが当流の意地⁴⁷⁾である。

本来武は^{みだ}濫りに用ふべからざるもの、太刀は常々鞘止めしておくべき程の物なるも、天地之道理（忠孝之道）に^{したが}順はんとして、逆らう敵を破らんと、一旦太刀を抜いたら、^{すなは}即ち大憤怒を振り起し、千が千、万が万ながら敵を倒す。堅甲断ずべし。天かける飛行機も撃つべし。大地も両断すべし。我が太刀折れなば空拳にて、両腕折れなば口にて、首断たれなば気魄^{はく}にて、必ず^{ただ}唯一撃を以て^{たお}斃す、否、立会って未だ撃たずとも、敵は五体慄然萎痺、遂に氣死する底の気魄を言ふのではないでせうか。而も無念無想、無我無心、生なく死なしの境地、^{いわゆる}所謂、大極は無極の如く、また、或は知って知らざる者の如く、^{あえ}敢て其の力を他に示さず言ふのです。勿論一時の付衛気の如きものでなく、^{ぎようじゆう}行住坐臥、千段万練、念々修行して到達した、我と意地が同一⁴⁸⁾体となる境地でありませうか。

「…“唯一撃敵を^{たお}斃さずんばやまず”といふ攻撃的気風と、頑健なる体力とを養ひ、^{ごう}剛毅、果斷、敬虔、礼讓、誠実と言ふやうな態度の備はった、日本武士の風格を練成⁴⁹⁾したいと言ふのが」自顕流を学ばせる目的だと説明したりもするが、これは何という激しさ・厳しさであろう。しかし、黒木の戦いぶりはまさにこの通りではなかったろうか。こんな教育を受けた「薩摩の武人中の武人」のような黒木にロンドン⁴⁸⁾は同行していたのだ。直接会って話す以上に彼の戦い方の中に「(薩摩の) 武士道」を見たことだろう。そして、黒木の中に生きている自顕流の精神と戦法の両方がロンドンに影響を与えたに違いない。

日本的な生き方への共感と薩摩武士道の影響

①ロンドンの「日本もの」と薩摩武士道

ロンドン⁴⁸⁾は、いわゆる「日本もの」と呼ばれる、日本を舞台にしたり日本人を主人公にした作

品をいくつも書いている。彼の著作の出発点になった作品も日本ものなら、未完の絶筆も日本ものである。ここではその中でもとりわけ日本人の考え方や武士道精神の影響を受けていると考えられる3作品を取り上げてみたい。

まず短編「戦争（“War”）」（1911）を見てみよう。この作品は人生の皮肉を描いたもので、日露戦争の取材の経験をもとにしたものだ。従来は日本ものと見られていなかった作品だが、相手役の兵隊がロシア人の風貌をしていることなどからしても、主人公は間違いなく日本人の若い偵察兵だからである。彼は偵察先において至近距離でロシアの老兵に出会うが、相手が丸腰だったため撃たずに逃がす。しかし次に会った時には、彼はこの老兵に撃たれて命を落とすのだ。

あまり主人公の個性は描かれていないが、彼が老兵を撃たなかったのは、まさにすでに触れた「武士の情け」ではないか。丸腰の相手、しかも老人を撃つことは日本武人としては卑怯なことであり、恥である。戦争には卑怯も何もないかもしれないし、この描写は欧米人にはなかなか理解しにくいのではないか。これはまさに日露戦争の取材をする中で黒木を見ていて発想したことなのではないだろうか。

ロンドンの日本ものの中で最も日本精神にあふれているのは、何ととっても「おはる（“O Haru”）」（1897）と『チェリー（Cherry）』（1916、未完）である。「おはる」は日露戦争に従軍する以前に書かれており、ロンドンが1回目の来日以来日本に関心を持ち続けたことが分かる。「おはる」の筋はこうだ。大名の重臣を父に持つおはるは、父が死んだあと芸者屋に売られるが、幼なじみの武士トヨトミと恋に落ち、彼が全財産を手放して彼女を請け出して婚約する。財産を失ったトヨトミは、金持ちになって帰ってきて結婚すると約束して海外に出かけ、おはるは芸者に戻って給料をためながら誘惑にも負けずに10年間彼を待つ。彼はついに帰国し二人は結婚するが、トヨトミは海外生活で人が変わってしまっており、浪費するようになる。おはるは自分の稼いだ金もすべて彼に提供するが、彼は西洋の習慣を彼女に押しつけようとし、二人の仲は悪化する。彼は暴力をふるい、浮気をして、彼女が夜の仕事をしないと離婚すると言い出す。おはるは悲嘆にくれた挙句、芸者に戻り、忠臣蔵の踊りを披露しながら父の刀で切腹して果てる。

女性が切腹したり、武家の娘が芸者になったりとややおかしいところもあるが、大石や豊臣の名を出したり、仏教に触れたりと十分に日本への関心を示している。侍の血を引いていることにこだわり、忠義や民族の誇りにも触れているのは興味深い。そして何ととっても「切腹」である。すでに触れたとおり、武家にとって切腹は「純化された自己破壊」であるから、おはるは武家の娘としての名誉を守るために死んだのだ。ロンドンが日本のことをよく知っていたことも驚きだが、この作品を読むと、彼が武士道に強い関心を持っていたことがよくわかる。

さて、黒木との関係で最も注目しなければならない作品は『チェリー』である。これは絶筆であるから、ロンドンが死ぬまで日本への関心を持ち続けたことを示しているし、第一、チェリー、すなわち「さくら」をタイトルにし、主人公の名にしているのだ。すでに述べたとおり、この名が日本人の精神を象徴していることは言うまでもない。『チェリー』のストーリーは次のようである。チェリーは赤ん坊の時、漂流した日本の難破船から救い出され、ハワイの裕福な牧場主のMortimer夫妻に育てられ、年頃の美しい娘となった。高い身分の武家の血を引くチェリーには、何人もの求婚者が現れるが、彼女は相手にしない。彼女が関心を持っているのは、実は、日本から来て庭働きをしている契約労働者の青年ノムラ・ナオジロウだった。ノムラは武士の末裔と思

われ、共通した面を持つ二人は音楽を通して惹かれあっていくが、ここで未完のままになってしまった。

Tony Williams は、ノムラやチェリーの描き方について次のように述べている。

London's references to Naojiro Nomura's strong presence and his thrashing of two white capitalists may have been too much for the post-Palmer Red Raids twenties dominated by the so-called Yellow Peril, the KKK, and racist legislation. ... Naturally, these references to the justified cause and stubborn attitude of an Asian woman causing chaos in a supposedly superior white society would not have suited the tastes of *Cosmopolitan's* average readership.⁵⁰⁾

ロンドンは、20年代すなわち自分の死後すぐの時代には到底受け入れられないような作品を書いたのだ。あの人種主義者で〈日本人嫌い〉のロンドンによってこの作品に書かれた日本人像は、Williams が“Nomura's noble presence”⁵¹⁾と言っているように、力強く、気高く、存在感のある人物として描かれているのである。それは黒木に代表される日本の武士道、特に薩摩の自顕流に憧れる気持ちを込めたからではないか。

この作品は、黒木の影響を強く受けて書かれたと言っていいだろう。何しろ「黒木」の名が直接出てくるのであるから。未完となる中断箇所に近いところに次のような記述がある。

... Plenty low Japanese say he look very much like Kuroki San and Kuroki San very high blood and big war general in Japan.⁵²⁾

この作品において有力な助演者で存在感の大きいノムラは、なんと薩摩武人「黒木」がモデルなのだ。そうして見てみるとノムラは確かに武士の要素をたくさん持っている。彼は、強い男として知られ恐れられてはいたが、普段は動きも鈍く、寡黙で眼でものを言うタイプであった。⁵³⁾これこそ、すでに触れた武士道の〈勇〉であり、“忍耐”であり、“寡黙”である。

そんなノムラが一度だけ激しい怒りを示し、すばやく行動する次のような場面がある。

... The *pupule* luna, on horse has riding whip, ...— the *pupule luna* hit Nomura on the head with riding whip because Nomura is not quick like the low coolies. Bingo! Nomura, the whip on the head, is very quick. He take the *pupule* Portuguese *luna* by the arm. It is like when you pick a flower that is tough in the stem, and that you jerk with a bend on the stem at the same time to break it— just like that, Nomura pick the *luna* from the saddle like a flower, and the *luna* is on the ground on his back, and his arm is much broken in the inside of the shoulder. Two months that *pupule luna* off the job in Queen's Hospital.⁵⁴⁾

この高速の変わり身と豪胆な闘い方はまさに武士の、そしてとりわけ自顕流のスピードと地力

に他ならない。武士道に言う〈義〉と〈勇〉の融合がここにはある。

②日本もの以外の作品と薩摩武士道

ロンドンの上記以外の作品にも武士道や自顕流の影響が見られると言えそうな部分があるので付け加えておきたい。まずは、『白い牙』（*White Fang*）（1906）である。後半ホワイト・ファングはスコット判事邸で飼い犬になるが、野性まで消えたわけではないことを証明するエピソードとして、いわゆる「三重殺」が描かれる。ある日、意地の悪い3匹の犬に侮辱されたホワイト・ファングは、すばやく音もなく走って、あっという間にその3匹を引き倒して殺害してしまうのだ。この場面と先ほどのノムラの場面はダブって見える。このスピードと変わり身は、やはり自顕流のそれのように感じられてならない。

また、ロンドンのアラスカものの傑作のひとつ「恥さらし（“Lost Face”）」（1908）について西山嘉子はこう言っている。

…この主人公の価値観の描き方は、ジャック・ロンドンが日本の武士道精神のようなものに影響を受けたことを示してはいないだろうか。戦の場で敵に殺されるくらいなら、武士としての誇りを持って、自分で腹を搔っ切って死ぬことを望むという、武士道精神の影響があると考えられないだろうか。⁵⁵⁾

…現実としてどうせ“死ぬこと”になるなら、美しい死を貫きたいという気持ち、願望が描かれているのではないか。これは武士道精神に特にみられる考え方ではないか。⁵⁶⁾

主人公のスビエンコフは、武士の「死の美学」のように、「相手に下に見られて死にたくない」、「助けてくれと懇願するより、自分の無様な姿をさらして死ぬより、心の中で自分が優位に立って、相手をあざむいて死にたい」と考えた。そしてその死に方を貫きたいがためだけに、あらゆる駆け引きをし、うそをついて、相手を納得させ、自分の望む方向に導いた。⁵⁷⁾

なるほどスビエンコフの首がポーンと飛んでいくこの作品の最後の場面はさながら武士の切腹のようでもあり、その介錯のようでもある。『白い牙』が出されたのが日露戦争の2年後、「恥さらし」が4年後のことである。案外、黒木為楨^{ためもと}から受けたインパクトがそこに表れているのかもしれない。

注

- 1) 椋鳩十との関係については、拙著『椋鳩十とジャック・ロンドン』（高城書房、1998）を参照のこと。
- 2) この章を書くにあたり、『図説 日露戦争』（河出書房新社、1999）、*Jack London A Definitive Chronology* (Middletown: REJL, 1992)、*Jack London Reports* (New York: Doubleday, 1970) を参照した。
- 3) 『三代軍人列伝 薩摩の武人たち』（南日本新聞社、1975）、p. 134.
- 4) 同上。

- 5) 同上, p. 134-5.
- 6) John Perry, *Jack London An American Myth* (Chicago: Nelson-Hall, 1981), p. 171.
- 7) *Ibid.*
- 8) 司馬遼太郎著『坂の上の雲』(四)(文春文庫, 文芸春秋, 1999), p. 156.
- 9) 同上, p. 142.
- 10) 同上。
- 11) 同上, p. 131.
- 12) 同上, p. 136-137.
- 13) Peter Slattery, *Reporting the Russo-Japanese War 1904-5* (Folkestone: Global Oriental, 2004), p. 93.
- 14) この章を書くにあたり, 他に『郷土と日本を築いた熱き薩摩の群像700名』(指宿白水館, 1990), 『鹿児島百年〈中〉明治編』(春苑堂書店, 1967)を参照した。
- 15) 巽孝之著『アメリカ文学史』(慶応義塾大学出版会, 2003), p. 121-2.
- 16) エリック・フォーナー著, 横山良ほか訳『アメリカ 自由の物語』(上)(岩波書店, 2008), p. 192-3.
- 17) Jack London, "War Correspondence," King Hendricks and Irving Shepard ed., *Jack London Reports* (New York: Doubleday, 1970), p. 24. 以下のカッコ内の数字は, すべてこの書からの引用ページを示す。
- 18) Philip S. Foner, *Jack London American Rebel* (New York: The Citadel Press, 1947), p. 59.
- 19) Oliver Madox Hueffer, "Jack London: A Personal Sketch," Jacqueline Tavernier-Coubin ed., *Critical Essays on Jack London* (Boston: G. K. Hall & Co., 1983), p. 33.
- 20) Jonah Raskin, *The Radical Jack London* (Berkeley: University of California Press, 2008), p. 134.
- 21) 新渡戸稲造著, 奈良本辰也訳『英語と日本語で読む「武士道」』(知的生きかた文庫, 三笠書房, 原著は1899年に出版, 2009), p. 25.
- 22) 同上, p. 39.
- 23) 同上, p. 37.
- 24) 同上, p. 59.
- 25) 同上, p. 61.
- 26) 同上, p. 97.
- 27) 同上, p. 103.
- 28) 同上, p. 107.
- 29) 同上, p. 127.
- 30) 同上, p. 135.
- 31) 同上, p. 137.
- 32) 同上。
- 33) 同上, p. 157.
- 34) 同上, p. 177.
- 35) 同上, p. 174-5.
- 36) 同上, p. 175.
- 37) 原口泉監修『図説 薩摩の群像』(学研, 2008), p. 48-9.
- 38) 酒井直行編『天璋院篤姫ガイドブック』(新人物往来社, 2008), p. 131.
- 39) 同上, p. 131.
- 40) 同上。
- 41) 同上, p. 133.

- 42) 同上, p.131.
- 43) このあたりを書くにあたり、『日本の剣術』（学研, 2005）, 『薩摩の秘剣 葉丸自顕流』（松永守道, 1976）を参照した。
- 44) このあたりを書くにあたり、『天璋院篤姫ガイドブック』, 『薩摩の秘剣 葉丸自顕流』, 『薩摩の秘剣 野太刀自顕流』（新潮新書, 新潮社, 2005）, 『三代軍人列伝 薩摩の武人たち』を参照した。
- 45) このあたりを書くにあたり、『日本の剣術』を参照した。
- 46) このあたりを書くにあたり、『薩摩の秘剣 野太刀自顕流』を参照した。
- 47) 『薩摩の秘剣 葉丸自顕流』, p. 57.
- 48) 同上, p. 56.
- 49) 同上, p. 57.
- 50) Tony Williams, “Cherry’s Conclusion ?,” *Jack London Journal* Number 6 (Chicago: 1999), p. 77.
- 51) *Ibid.*, p. 92.
- 52) Jack London, *Cherry*, *Jack London Journal* Number 6, p. 61.
- 53) *Ibid.*, p. 60-1.
- 54) *Ibid.*, p. 61.
- 55) 西山嘉子著「ジャック・ロンドンの異文化理解について」（鹿児島国際大学大学院国際文化研究科修士論文, 2009）, p. 34.
- 56) 同上, p. 35.
- 57) 同上, p. 36.

付 記

この論文を書くにあたって、韓国の地名については鹿児島国際大学の井上和枝教授より、自顕流については鹿児島市議会議員奥山嘉次郎氏に、ご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。